戦争体験記録

赤羽勝子
上高田一丁目

「敵機来襲！　敵機来襲！」夫の緊迫した大きな声が、夜の闇の中にひびいた。メガホンを手に叫ぶ声に、私は幼い児を抱きかかえて防空壕の中へ飛び込んだ。その時大きな爆音と共に、大阪の上空を、探照燈の中にきらきらと白く光る巨大な魔物の様な敵機B29の姿がくっきりとうつし出された。しばらくしてから我が子も幼いながらも、こわごわ壕の中から少し顔を出して、頭上を飛び去って行く敵機を見て指さしていた。まだ三歳だった児の記憶の中にはっきりと刻み込まれたものは、生涯怖い思い出として忘れるものではないと思います。

敵は食事の頃の火を使う時をねらって来襲して火災をおこすのがねらいで、何時も昼、夕食時の頃私達の心を脅やかし、そして爆弾を落して破壊して行くのです。一時敵機が去っても又次々に来襲して、夜も眠る事も出来ずに真暗い家の中に息をひそめている毎日毎夜。心身共に疲れはて、又、毎日の食事も配給のために、ほんの僅かばかりの食料で、子供にはせめて雑穀類をお粥にしたものを食べさせて一日一日を凌ぐ状態でした。

夫は昼間は会社務め、夕方家に帰って来て、隣組の組長として責任があり任務を負わなければなりませんでした。

或る時は、爆音とともに夫の鼻先へ大きな白い板の様な一メートル四方もあるものが落ちて来て、一瞬体をかわして難を免れる事が出来ました。その時は幸にして強風があり、そのため風に流されてよけられたのかも知れません。その板様なものは、私の家から二軒目の庭先に落ちましたが、白いジュラルミン製のもので、焼夷弾をつめた外枠でした。

飛行機から落すと、空中で分解して大きな枠が外れ、焼夷弾が何本かバラバラに落ちて来る仕掛になっていて、焼夷弾の先には何本かの赤黄青とりどりの布切れがついていて、樹木や屋根等にひっかかって爆発する仕掛になっているとかいうことでした。五百メートル位離れた神社の近くにその焼夷弾が落ちて、防空壕の中に入っていた三、四人の人が死んだとか聞きました。

二、三日が過ぎて行って見ると、畠の中に沢山の焼夷弾が並べてありました。その時の強風がなかったならば、我家にバラ

バラ焼夷弾が落ちて助からなかったかも知れません。それを思うとほんとうに幸運だったと思います。

紙一重の生と死。自分達で掘った壕の中で死んだ人、スコップ等で穴を掘る防空壕等気休めに過ぎず、又疲れている体で焼夷弾を消す為のバケツリレー等の練習に身を粉にしての毎日でした。

その様な状態で日に日に戦況も悪化して行くばかりでした。私の実家では一日も早く疎開するよう強く言って来ました。けれども、夫が居る限り自分も一緒にここで死んでも良いと覚悟は決めていましたが、昭和十九年十一月に次男を出産してからはますます戦況も烈しく、長男の手を取り次男を抱きかかえて防空壕等へはとても入れません。まして壕の中で死んだ人の事等思うと、家の中で押入れに入り息をひそめていました。

信州の実家からは疎開の再三の催促で、親は子供の為に生きなければいけないと思い、両親の勧めにほだされ又夫にも言われて、間もなく東京に大空襲があり、直ぐ疎開の決心をしました。実家へ帰る汽車の切符を買うにもすぐには手に入らず、何回も足を運んでようやく手に入れることが出来ました。

夫の召集令状が何時くるかと案じながら、親子三人は実家へ疎開しました。親の元でゆっくり食事をして眠る事が出来ましたが、それにつけても夫は今頃どうしているのかそんな心配をしつつ過ごしました。幸い夫の身にも何事もなく、昭和二〇年八月十五日に天皇陛下の玉音放送があり敗戦を知りました。

それまでは、私達は幼い頃から今まで戦争に負けた事はないから、日本は神国だから、神風が吹いて絶対に負けるものではない、皆勝てるものと信じていました。とんでもない事でした。本当に日本が負けたのです。しばらくは何も手につかずに、皆呆然として何をする気力もありませんでした。

でも本当に負けたのです。今にしてみれば負けて良かったのかも知れません。

外国では戦争戦争で明け暮れ、国民が泣き暮らしている姿を見るにつけて、今の我が国の平和を有難く思っています。

戦争とは人間性の喪失、人間同士が殺し合い国を破り亡ぼす、何と残虐で恐ろしい事でしょう。戦争の後には必ずつきものの戦いと言う病気の「後遺症」が出てくるものです。今頃になって朝鮮婦人慰安婦の問題の代償等いろいろな事が大きくクローズアップされて、日本国民の恥を晒されてたまらない気持ちです。これからどのように償って行くのでしょうか。心痛めずには居られません。

世界が平和になる為にはどうしたらよいのか、これからの世の中は自分の国だけではなく、国際人としてどのようにして行かなければいけないか、それは今後世代を継ぎ、生きて行く人々に課せられた重要な問題ではないでしょうか。